源平物語～けんしの事情～

Gemini=Zodiac=Lin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

源平物語～けんしの事情～

【Ｎコード】

Ｎ３３１５Ａ

【作者名】

Ｇｅｍｉｎｉ＝Ｚｏｄｉａｃ＝Ｌｉｎ

【あらすじ】

平凡？な高校生・源宗（みなもとしゅう）と平凛（たいらりん）が創り出す、あいとゆうきの物語――人は大切な何かを得る為に、時として大切な何かを失なわなければならないのだろうか？

0話　俺！の自己紹介？

俺、源（みなもとしゅう）宗は青春真っ盛り１７歳
身長はそこそこ高い。背の順で言えば後ろの方
体重なんかは身長相応
自慢じゃないが毎日鍛えてたりするので引き締まっていると自負してる
顔は…聞かないでください
というか顔の自己評価なんて出来ねぇよ！ナルシストじゃねぇんだし！
コホン、話を戻して自己紹介を

で、元・源流拳術道場の跡取り息子

何で元かって？
それはもう教えてくれる人がもう居ないから
爺さんも、親父も、俺が小学生の頃、一緒にこの世界から居なくなってしまった
母ちゃんは源流拳術道場の門下生だったらしいんだけど皆伝にまでは至っていないとの事
今は女手一つで俺を育てる為に外に出て働いてるから道場の存続の事は二の次らしい
照れ臭い話だけど「道場よりも貴方を健やかに育てる方のがずっと大切です。」とか昔言われたっけ。
それは良いとして
担い手の居ない道場
口伝でのみその心技を伝えてきた源流にとって実質途絶えてしまった事を意味する

だから俺は元・跡取り息子
もう源流拳術は存在しないに等しい

…等しい、っていう言い方には語弊があるかもしれないけど
もう誰も教える事ができないんだし
でも、それって、何か悲しいからそんな言い方をしてみた。深い意味は無い…と、思う。

以上！説明的俺の自己紹介終わりっ。

こんなんで良かったかな？

1話　起床！過激な目覚まし時計？

―――ジリリリリン
けたたましく目覚ましのベルが鳴る。
すぐさま布団から手を出す
鳴ったら止める、これ必然

「んぁ…」
眠い、もうこれ以上どうしようもないってくらいに
寝る時は、そんな事はなかったってのに起きる時っていうのはどう
してこうも眠いんだろう…

「おはよ～…って、うわっ、相変わらず汚いなぁ…。」

「…ぅん。」
現在の所その誘惑に勝てる気はしない
こういうモノは無理に抵抗するよりも、素直に受け入れた方が楽な
んだ
苦行じゃないんだし、眠いなら寝る、これが自然の摂理というものだ
そもそも、起きれないってことはまだ体が睡眠を欲しているからな
んだから、このまま寝るのが体のためなんだ

「おはよー？しゅーちゃーん？朝だよー？」

「……すぴょ。」
色々と屁理屈を考えて惰眠を貪る事に決定
そうだ、俺はまだ寝なきゃいけないんだ。

「おーい！しゅーちゃーん！あ・さ・だ・よーーー！」

「……。」

何か、大事なことを忘れてる様な気がしないわけではないが
今、こうして眠ている事は仕方のない事なんだ…
うん、そうだ、仕方がない、しかたがない、シカタガナイ…

「うるぁおおおおおおおおおおおおおお！起きんかぁあああああああああ！！」

「ぐむぁっ！？ってぇえええ！！！」
○×△■☐×○△！！！！！！

「あ、起きたー♪おはよー。」

「ッォォォォおおおおおおおおおおおおお

「…あぁ、そうだな遅刻しちまう…って、おい！凛、またやりやがったな！その起こし方禁止つってるだろぉがぁ！！」

「ぶー。残念でしたー今日は木製バットだよ？」

「得物の問題じゃねぇえええええええ！たんこぶ出来てんだろがぁっ！！」

超痛い。あぁ、冷静になる必要もなければ、現状認識をする必要もない

お隣に生息する筋肉馬鹿娘の平（たいら）凛（りん）が起こしにきたんだ、今日の得物は木製バットらしい

「でも、そうでもしないとしゅーちゃん起きないもん～。」

さも正当そうな事を言っておきながら、やってる事は殺人未遂だ、てめぇ

「そういう問題でもねぇえええ！！ほら！みれ！これをみれ！タンコブできやがんぞ、痛ぇ！お前のせいでマジ頭の形が変わるぞ！どうしてくれんだ！」

「えぇ～？木製バットで一度ぐらい叩いても頭の形は変わんないよ？」

毎朝、ほぼ同じことをされる身としては、本当に頭の形が変わっていないのか非常に心配なのだが

「ダンベルよりはマシかもな！！でも広辞苑以上だ！お前、そのうち俺を殺す気だろ！！！」

「ヤだよ、私捕まりたくはないよ。」

「だったらもう少しマシな起こし方しろよ！他にあるだろう！！違う起こし方が！！！」
あぁ、血圧が急上昇してるのが分かる。
頭がスッキリしてきた、痛いけど。
大声だしてるせいか、意識は落ち着きはじめてる。

「他？どんな風に？」

「優しく揺するとか！甘く耳元で囁くとか！」
そういう、甘くてスィートなエッセンスが寝起きには必要なんだ！
決して、木製バットや、ダンベルや、広辞苑による殴打じゃない！！

「ヤ。それは何か私がヤだ。」

「どういう事だテメェ、そこへなおりやがれ！」
態勢を整え、お返しに凛に頭一発お見舞いしようと襲い掛かか…

「ねぇ？何するつもり？その振り上げた拳をどうするの？」
凛は木製バットを杖代わりに片手を腰にあててコチラをジーっと見つめている

「……ナンデモナイデス。」
弱者は常に強者に虐げられるのです、悲しいけどこれが現実なのよね

「ほらほら、くだらない事してないで、早く着替えて着替えて！」
母親かってーのお前は

「わーってるよ、着替えるから出てけよ。」

「へ、何で？」
素っ頓狂な声を上げましたよ、この娘
しかも疑問系ですよ、この娘

「殴るよ？」

「殴り返すよ？」
ごめん、バットによる殴打はもう勘弁して欲しい

「だぁーーーーーーーーー！いいから出てけ！恥ずかしいの！！俺が！！！」

「まぁーったく、しゅーちゃんったら、恥ずかしがり屋さんなんだから。」
お前は痴女ですか？

「うっせぇ！うっせぇ！しっしっ、早く行け！」

「はぁーい、しょうがないなぁ～。」
しょうがないじゃねぇ、アイツ本当に女なのだろうか。

しぶしぶと窓から出て行く凛
自然と片足を上げる形となって、少し小ぶりだが引き締められた形の良いヒップを包む小さな布キレが制服のスカートの合間から姿を見せる
毎度毎度の事ですが見えてますよ？
ふむ……今日はピンクか。

「む。殺気。」
振り返ったと思った瞬間、流れる様な動作で手に持たれていた得物

が放たれる
その動作の無駄のなさといったら、まさに獲物にトドメを刺さんとする狩人の一撃

「ゴフッ！？」
み、み、鳩尾にバットがぁあああ…
メリコンんでる！メリコンじゃってるよ！ボクのミゾオチに木製バットが！

「しゅーちゃんの、えっち…。」
少し顔を赤らめながらスカートを片手で抑えながらこちらに文句を垂れてくる
まぁ、見てしまう俺も俺だと思うのだが、こちらは半ば不可抗力に近いものがある
それに引き換え、学習能力ってモンがないのかお前は！
見て危害をくわえられるこっちの身にもなってくれ！

「…ごめんなさい、もう、本当にお願いします。早く出てってください。」
ここまで一方的に理不尽な攻撃を受けてるが。
もうこれ以上被害を大きくしない為には、俺が大人になって一歩退けばがすむのだ。
凄く腹立つけど

「もー、しらない！本当っ！しゅーちゃんはお子様だなぁ。」
お前が言うな！！！！！！！

こうして俺の一日が始まる

2話　登校！隣のお嬢様？

制服に着替えると居間へと向かう。
そこには既に用意されていた簡単な朝食と本日の弁当が食台に鎮座していた。

母ちゃんは俺が起きる頃にはとっくに家を出ている。
だからこれが変わらぬ朝の風景。

さて、そうそう悠長にしている時間も無いので朝食を頂く事にする。
ご飯に味噌汁、鮭と海苔と漬物。
基本的に1汁3菜
それらをありがたく食べ終えると弁当を学生鞄代わりに愛用しているリュックへとしまい込み玄関へ。

学校指定の革靴もあるんだけど、どうも性に合わないらしく
愛用の少しくたびれた運動靴の方を履く。
そして振り

「行って来ます。」

誰も居ない家へと向かいそう声をかける。
返って来る声が無い事は重々承知してるんだけど。
まぁ、習慣みたいなもんで、深い意味は無い…と、思う。

「うぁ…今日も外は眩しい…鬱だ。」

毎朝思うのだが、どうも自分は朝というものは苦手らしい。
何故だ？

どこぞのお嬢様の凶行が知らない間にトラウマに？
……。
……。
……。
本気でありそうで怖いからあまり深く考えるのは止そうじゃないか！うん！！
「しゅーちゃん、遅いよ！ほらほら、早くしないと遅刻しちゃうよ！」
なんて事を考えてたら件（くだん）のお嬢様が小憎たらしいぐらい元気にこちらへ走ってくる。
「あぁ？平気だって、この時間に家出りゃ歩いてもギリギリ間に合う。」
俺計算では走ればもう15分遅れても間に合うハズ。
「もぉー。ギリギリじゃなくって、たまには余裕もって行こうよー。」
その余裕を睡眠に回したいお年頃なのよ。
「じゃ、俺待ってないで勝手に先行ってりゃ良いだろうが。」
正論を振りかざしてみる。
「うわぁ～、今日も良い天気で眩しいね～。気持ち良いね～。」
無視ですか。
「ったく、もの好きな奴。…ふぁあ、眠ぃ。」
そんなくだらない会話をしながら、学園へと続く道を歩き始める。
2年生ともなると、やっぱり1年生の時の新鮮な気持ちのままでっ

ていうわけにもいかない。
色んな事に慣れが生じ始める。
古文教師である増田の授業は期末考査前のまとめの時に真剣に起きておけば平気とか。
数学教師である加藤の授業は小テストでそこそこ点数とっておけば期末考査はそれほど頑張らなくても良いとか。
体調不良を言い訳に保健室で寝るテクニックとか。
体育の持久走のショートカット場所とか。
慣れというか楽する事を覚えるというか…
だから、こうして学園に通う道は半ば惰性で歩いている感が強かったりする
距離はあまり大したことがないんだけど、だるいんだな、これが。

慣れと言えば、隣で何が楽しいのか笑顔で空を見上げている馬鹿娘と、こうして一緒に歩くのにも別段違和感が無い
高校生にもなって女と登校？（逆に、だからこそか？）
え？ラブラブ？
バカップル？
とか、思われそうなんだけど、そういう事なんてこれっぽっちの一欠けらだって無い、うん、無い。
絶対無い。

平　凛　（たいら　りん）
身長は…女子の中じゃ高いってわけでもなければ低いってわけでもない。背の順で言えば真ん中ぐらいか？
体重は…体躯から想像するに重くはないと思う。詳しくは知らね。
顔は…どうなんだろう？そういう目で見たことは無いから、これも知らね。

で、平流剣術道場の一人娘＝跡取り

本人は長刀の名手でその手の筋の人に言わせれば有名人らしい。
長刀以外の剣術も一通りこなせるらしく
１年生の時、体育で女子は創作ダンスを、男子は柔道ｏｒ剣道の好きな方を選択、とかいうのがあるんだけど
『私は創作ダンスじゃなくって男子と一緒に剣道がしたいです！』
とか言って
一躍有名人になってた事件もあった。
結局駄目だったらしく『創作ダンスもやれば楽しいね。』とか言ってたっけ。
まぁ、そんな感じで基本的に運動能力は持久力・瞬発力共に高し。
頭も悪くは無い。
少なくとも俺よりは頭が良い…（ちっ）
多少（というか、かなり）思考回路には問題があるとは思うのだが。

あちらは父親も母親も祖父母もご健在。
といっても父親・母親は欧州の方にある平流の道場の運営や管理やらででてんてこ舞い。
年に数える程しかここには帰ってこない。
平流ってのは結構ワールドワイドな活動をしているらしい。

しかし…言ってたとか、思うとか、らしいとか。
今ひとつパっとしない表現だなぁ…他人の俺が評価してるんだから仕方ないんだけどさ。

話を戻して、凛と俺の家はお隣同士なんだけど
屋敷と道場を囲む塀が２つ合わさってその地域の区画を結構占領してるもんだから
付近では、わりと有名。
地図の上に真ん中を区切ったティッシュ箱を置いた様な感じ？

うわっ、表現が貧相だな、俺
なんか始祖辺りの関係で、道場が隣り合っててそのままソコに屋敷を構えてとかそんな話があるんだけど
詳しい事は忘れた
そういった昔話を詳しく知ってる人は、少なくとも俺の家にはもう居ない。
だから、悪いけどあまり良く覚えていない。

家が隣同士だと、どうしても幼稚園・保育園・小学校・中学校っていうのは同じになっちまう
のが避けられない運命って奴らしい。
両親が向こうの両親と仲が良かったってのもあるかも知れないけど。
だから、生まれた時から凛とはずっと一緒でつまり現在進行形で幼馴染、
こうやって一緒に歩く事に全然違和感は感じてはいない。
むしろ、アレを異性として見ろという方のが難しい。

だってそうだろ？幼い頃ならまだしも、
俺にとっては妹に（妹と言うと奴は猛反論してくるが、俺のが大人だ絶対姉じゃない。）欲情しろって言ってる様なもんなんだぜ？
世の中にはそういった嗜好を持ち合わせた人も居るらしいが、俺はそうじゃないから、それを理解する事はできない。
だから、こいつと一緒に歩くのは家族と出かけてるそれと同じ気持ちなんだと思う。

何時だって側にいるから――――
何時だって隣にいたから――――
だから――――

それが当たり前だったから―――

「って、しゅーちゃん！何ボーっとしてるの！ほら、もう着くよ！しゃきっとしないとダメだよ！」

「あぁ？」
知らない間に考え込んでいたらしく、凛の声に気づいた時はもう学園の正門に辿り着いていた。

「もー。さっきの話も全然聞いてなかったんでしょ！」
さっきの話？へ？何の事？
少々ご立腹のらしく頬を膨らませコチラを軽く睨んでいる。
面白い顔だ。

「その顔ブサイクだな。」
直球ストレート。やべっ、つい本音が。

「私思うんだけどさ。鞄の角ってさ、金具とかで補強がしてあるから結構痛いと思うんだ。」
凛が満面の笑顔で物騒な事を口走っている。
冷や汗が背中を伝わっていくのを感じた。

「嘘です、ごめんなさい。」
ホームランを打たれる前に、全力で敬遠させていただきます！

「んもぉおおおお！しゅーちゃんの馬鹿っ！！！」
凛の腕が動いたと思ったが否や
ヒュッという音と共に鼻に走る激痛。

「いっでぇえええええええええええええ！？！？！？」
敬遠した球打たれちゃったよ！！！
やばいよ、奴は本物のスラッガーだよ！！！
いや！それよりも鼻が！鼻が！！

「もー！知らないっ！」
一人で、駆け出し校舎を目指す凛の背中は次第に小さくなって消えていった
うずくまり鼻を押さえる俺、すれ違う生徒の視線がちょっと痛い
とりあえず我慢して立ち上がる
目じりに浮かんだ涙を制服の袖で拭くと鼻を抑えながら同じく校舎へと向かって歩きだす

私立青陵学園
ここが俺達が通う学び舎
さて、今日も代わり映えのない退屈な一日が待っていそうだ。

2話　登校！隣のお嬢様？（後書き）

こういった文章を書くのが初めてで＞ｂｒ＜句読点の付け方などに悪戦苦闘しながら書いています＞ｂｒ＜読んで下さった方、ありがとうございます＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜助言や感想など頂けると凄く勉強になるので＞ｂｒ＜忌憚の無いご意見・ご感想を下さると凄く嬉しいです＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜そして、今一つシステム操作が分からない私は今頃挨拶＞ｂｒ＜――――ダメすぎ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3315a/

源平物語～けんしの事情～

2010年10月28日07時24分発行